

発明文化論

〈第43回〉

丸山 亮

自然保護思想の由来

サンフランシスコを訪れた機会に、天然記念物ミュアーの森を訪れた。巨樹カリフォルニア・レッドウッズが天に向かって聳えていることで名高い。

ゴールデンゲートを渡って車で少し行くと、国の管理する森の入口にたどり着く。入園料を払い歩道を歩き始めてすぐ、いきなりすらっとした木が目の前に現れた。赤みを帯びた樹肌で、葉っぱは杉に似ている。百メートル近い木を見上げるには、かなり首をそらさなくてはならない。樹齢千年を超えるというそんな木がかなりの密度で生えている。手つかずの自然林だが、地面は暗いというほどではない。下草も生えていて、ところどころに木の間からのぞく青空と白い雲を見ながら散策道を行くのは気分がいい。頭の赤いウッドペッカーと呼ばれるキツツキが倒木の腐った樹皮をつつきながら虫をついばんでいるのを、うっとり眺めた。

レッドウッズは同様に巨樹で有名な類縁のメタセコイアに幹の太さでは及ばないものの、樹高はむしろ高い。その見事な森が残ったのには、土地の実業家ウィリアム・ケントと家族の尽力があった。19世紀中頃のゴールド・ラッシュやその後の開発で国土が荒れるのを見かねて、1905年、この土地を買い上げ、連邦政府に寄付。森の名前を彼の希望で自然保護家として聞こえていたジョン・ミュアーの名前をとってミュアーの森としたのだった。ミュアーは彼の名を冠することを荣誉と受け止め、承諾したという。この森は1908年、全米初の国家記念物保護の指定を受けた。

ところでジョン・ミュアーはスコットランドに生まれてアメリカに移住し、ヨセミテ公園をはじめ、全米に国立公園が生まれるきっかけをつくった人物だ。出自からすると、ケルト的な自然への畏敬の念が彼の根底にあるように思われる。

アメリカだけでなくカナダも、森林の保全は難しい問題だろう。つい近年は、原住民と森林伐採を続ける商業資本との間で訴訟が起こっており、木材輸入国の日本はそれと無縁ではない。

産業革命による自然破壊の進行は、ヨーロッパの方が一足先だ。このためイギリスでは19世紀末に保護を目指す土地や建造物を買上げるナショナル・トラストの運動が芽生えた。童話作家ベアトリス・ポッターがその運動で湖水地方を守ったことはよく知られている。ドイツでは1915年、ワイマール憲法が、自然記念物や景観の保護を国家の義務と定めた。

一方、日本では古来、樹木に宗教的な感情を抱いてきた。木霊という言葉があり、その樹木信仰がある程度、自然保護の役割を果たしていたとも考えられるが、近代化の過程で大量の木材が必要とされるようになると、事情は一変する。そうして自然への敬意も薄れていった。明治39(1906)年から、政府は神社の統合を国策として進めた。いわゆる神社合祀で、廃止の対象となった神社は、鎮守の森までが切られる事態となった。そのとき体を張って抵抗したのが民俗学者の南方熊楠だ。森に生育する粘菌などの生物に関心を寄せていた彼にとって、それは看過できない暴挙と映った。南方の努力で豊かな自然の残る田辺湾の神島は伐採から守られ、神社合祀の動きはやがて終息に向かうが、破壊された森林も大きかった。

日本の国立公園制定は、1931年の国立公園法が施行された年に遡る。これは欧米に比べると、20年以上の遅れがある。近年、世界に誇れるブナ林の広がる白神山地がユネスコの世界自然遺産に制定されたのに続き、小笠原諸島も同じように登録される。保護の思想や仕組みは外来のものだが、それを実効あるものとする日本の力量が試されよう。

(まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士)